



物語の始まり

竹取物語 たけとり

目標

- 仮名遣いに注意しながら音読し、古典に親しむ。
- 登場人物の関係や心情に注意して、内容を理解する。

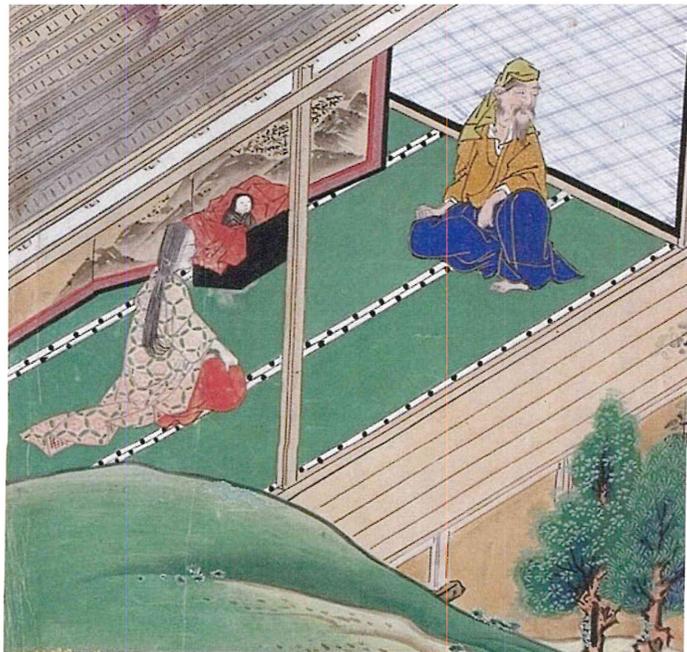
物語は、古くから多くの人に親しまれてきました。かぐや姫が登場する『竹取物語』は、平安時代の初め頃に書かれました。『竹取物語』は次のように始まります。

今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。
野山にまじりて竹を取りつつ、よろづ
のことに使ひけり。名をば、さぬきの
造となむいひける。

今ではもう昔のことであるが、竹取の翁という者がいた。野や山に分け入っていつも竹を取っては、いろいろなことに使っていた。(翁の名は、さぬきの造といった。

▼ 翁
▼ 頃 姫

おじいさん。



翁と妻の姫は、かぐや姫を大切に育てた。(『竹取物語絵巻』)



その竹の中に、もと光る竹なむ一筋
ありける。あやしがりて、寄りて見る
に、筒の中光りたり。それを見れば、
三寸ばかりなる人、いとうつくしうて
ゐたり。

5

(ある日、)その竹の中に、根もとが
光る竹が一本あった。不思議に思つて
近寄つて見ると、筒の中が光っている。
それを見ると、三寸ぐらいの人が、と
てもかわいらしい姿で座っている。

翁がこの子を家に連れて帰り、嫗と大切に育てたところ、この子はわずか三か月
で輝くばかりに美しく成長し、「なよ竹のかぐや姫」と名づけられました。かぐや
姫には多くの男性が求婚してきました。特に熱心だった五人の貴族の若者の一人
一人に、かぐや姫は結婚の条件を提示しました。それは「蓬萊の玉の枝」「竜の首
の玉」などの、この世に存在するかどうかわからない伝説上の品々を持つてくると
いう難題で、誰も果たすことができませんでした。その評判を聞いた帝からも求婚
されましたが、かぐや姫は応じませんでした。

10

それから三年ほどたった春の頃から、かぐや姫はもの思いにふけり、月を見て泣
くことが多くなりました。翁がその理由を尋ねると、姫は「私は月の都の者なので

三寸 一寸は、約三セ
ンチメートル。

▼婚

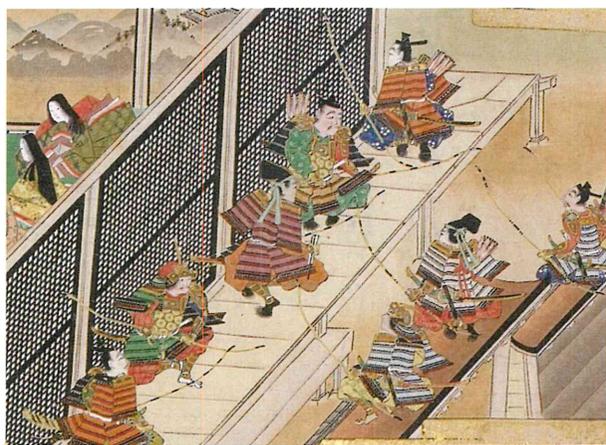
蓬萊 仙人が住むとい
われる伝説上の島。

▼竜

▼誰

す。八月十五日には迎えが来て、月の都へ帰らなければなりません。」と答えました。翁からそのことを聞いた帝は、二千人の兵士を遣わして家を守り固めました。やがて、夜中の十二時頃、辺りが昼間よりも明るくなり、大空から雲に乗って、天人たちが降りてきました。

5



兵士がかぐや姫の家の守りを固めた。

大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに立ち連ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、ものにおそはるるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。

10

大空から、人が、雲に乗って下りてきて、地面から五尺ほど上の辺りに立ち並んだ。これを見て、(家の)内や外にいる人たちの心は、何かに襲われたようになつて、対戦しようという気持ちもなくなった。

人々が、なすすべもなくぼんやりと見守っていると、天人は翁を呼び出し、「姫は天上で罪を犯したので、しばらくけがれた地上にいることになつたのだ。今はそ

▼迎

五尺 一尺は、約三十センチメートル。一尺は十寸。

の罪も消えたので、呼び戻すことになった。」と伝えて、かぐや姫に天の羽衣あまはごろもを着せようとしています。

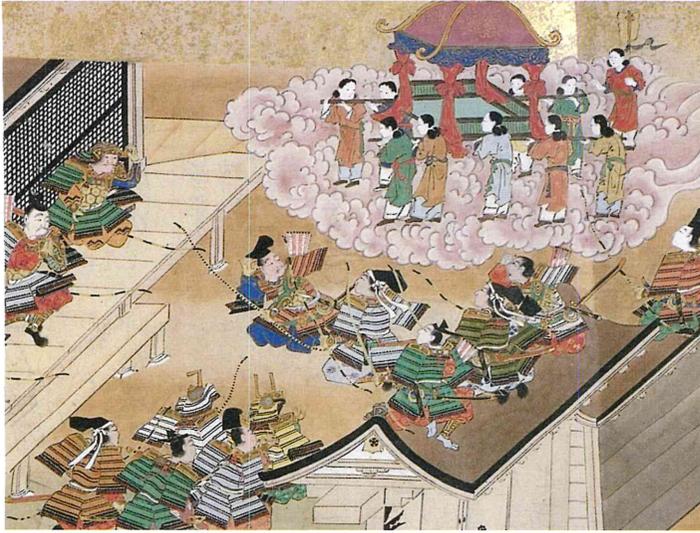
そのときに、かぐや姫、「しばし待て。」と言ふ。「衣着きぬせつる人は、心異こころになるなりといふ。もの一言ひとこと、言ひおくべきことありけり。」と言ひて、文書ふみく。天人あまのついで、「遅し。」と心もとながりたまふ。
*(マウ)

かぐや姫、「もの知らぬこと、なのたまひそ。」とて、いみじく静かに朝廷おほほに御文おほほ奉りたまふ。(モウ)あわてぬさまなり。

かぐや姫は、帝との別れを惜しんだ手紙と不死の薬とを使いたくに託します。

そのときに、かぐや姫は、「しばらく待ちなさい。」と言う。「(天人が)羽衣を着せた人は、心が変わってしまったと聞く。一言、言っておかなくてはならないことがあった。」と言って、手紙を書く。天人は、「遅い。」と(言つて)いらいらしていらつしやる。かぐや姫は、「ものわからないことをおっしゃるな。」と言って、大変静かに帝にお手紙をさしあげなされる。(そのさまは)落ち着いた様子である。

*(マウ)でもよい。



天人たちがかぐや姫を迎えにきた。

ふと天の羽衣うち着せたてまつりつ
れば、翁を、「いとほし、かなし。」と
思しつることも失せぬ。この衣着つる
人は、もの思ひなくなりければ、車
に乗りて、百人ばかり天人具して、昇
りぬ。

(かぐや姫に天人が) さっと天の羽衣を着せてさしあげると、(かぐや姫は) 翁を、「気の毒だ、いたわしい。」とお思いになつていたこともなくなつた。この羽衣を着た人は、もの思いが消えてしまうので、そのまま(飛ぶ)車に乗つて、百人ほどの天人を引き連れて、(天に) 昇つていった。

落胆した帝は、その後、臣下に命じて、かぐや姫から渡された不死の薬と手紙を、都から近く天からも近い山を探して、その山頂で焼かせました。臣下の者が士(兵士)を多く引き連れて行つたため、この山を「士に富む山」、つまり「富士山」と名づけたのでした。

10

ふと さっと。

車 天を飛ぶ車。

▼ 胆 ▼
▼ 渡 ▼

《出典》『新編日本古典文学全集』12 竹取物語 大和物語 伊平中物語』によつた。

千 みちしるべ

内容を捉えよう

- 1 古典の仮名遣いに注意して、音読しよう。
- 2 古典の文章と、現代の文章とでは、どのような点に違いがあるか、考えよう。

読み深めよう

- 3 天人に「しばし待て。」(P121L3)、「もの知らぬこと、なのたまひそ。」(P121L9)と言った時の、かぐや姫の心情について考えよう。

自分の考えを伝え合おう

- 4 絵本などで読んだことのある「かぐや姫」と、『竹取物語』とはどのような点が異なるか、文章にまとめよう。

振り返り

- 古典の文章と現代の文章の、仮名遣いや表現の違いを理解しているか。
- かぐや姫の言動から、どのような考え方や心情を読み取っているか。

この教材で学ぶ漢字

118 姫
ひめ 姫君

118 頃
ころ 頃をみる

119 婚
コン 結婚

119 竜
リュウ
たつ 登竜門
竜巻

119 誰
だれ 誰かの声

120 迎
ゲイ
むかえる 送迎
客を迎える

122 胆
タン 大胆

122 渡
ト
わたる 渡航
渡り鳥

新出音訓

120 犯す (おかす)

121 羽衣 (ころも)

古典の仮名遣い

古典の文章で使われている仮名遣いを「歴史的仮名遣い」といいます。「歴史的仮名遣い」は現代の仮名遣いと異なるので、次のような点に注意が必要です。

① 語中・語尾の「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」「は

↓「ワ」「イ」「ウ」「エ」「オ」と発音

例 あはれ↓アワレ もの思ひ↓モノオモイ

とふ↓トウ いへ↓イエ

いとほし↓イトオシ

② 次のような「む」「なむ」↓「ん」「ナン」と発音

例 竹なむ↓タケナン 戦はむ↓タタカワン

③ 次のような母音の連続は伸ばす音に

「ア段」+「う・ふ」↓「オ段」の長音 (au→ō)

「イ段」+「う・ふ」↓「ユウ・オユウ」(iu→yō)

「エ段」+「う・ふ」↓「ヱウ」(eu→yō)

例 らうたし↓ロウタシ

うつくしうて↓ウツクシウテ

てふてふ↓テヨウテヨウ

④ 「ゐ」「ゑ」「を」↓「イ」「エ」「オ」と発音

例 おなか↓イナカ こゑ↓コエ をかし↓オカシ

⑤ 「ぢ」「づ」↓「ジ」「ズ」と発音

例 もみぢ↓モミジ よろづ↓ヨロズ

古典の言葉

古典の言葉には、語形も意味も現代語と変わらないものがたくさんあります。しかし、次のようなものもあるので、注意が必要です。

① 現代語と語形はあまり変わらないが、意味が異なるもの。

例 うつくし (かわいらしい) ある (座すわっている)

② 言葉そのものが現代語にはないもの。

例 いと (とても) げに (本当に)



いろは歌

いろは歌は、四十七の仮名を一回ずつ使って作られています。音読して、古文ならではのリズムに慣れ親しみましょう。

いろはにほへと ちりぬるを

色はにほへど

散りぬるを

わかよたれそ つねならむ

わが世たれぞ

常ならむ

うみのおくやま けふこえて

有為の奥山

今日越えて

あさきゆめみし ゑひもせず

浅き夢見じ

酔ひもせず

目に見える色は美しくても 花もついには散ってしまう

世の中でいったい誰が いつまでも生きていることができよう

険しい山（困難の多い人生）を 今日越えて

浅い夢を見ることなどするまい 酔ってもいないのに

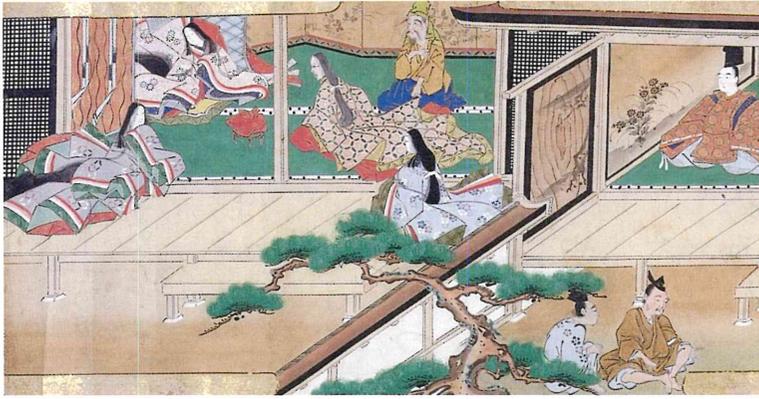
いろは歌 平安時代中期以降に作られたものと考えられる。一〇七九年に写された承暦本『金光明最勝王経音義』に記載されたものが最古のものとして知られる。



五人の求婚者と難題

五人の求婚者に、かぐや姫はどのような難題を出し、求婚者たちがどのように奮闘したか、絵巻の絵で味わってみよう。

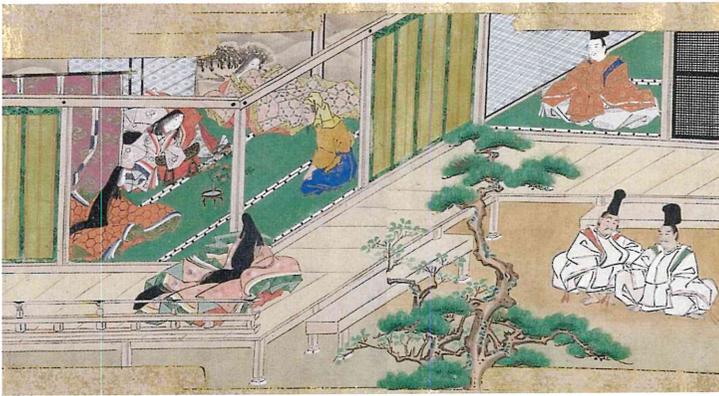
石作の皇子



仏の御石の鉢
 釈迦が用いたという、石
 でできた鉢。

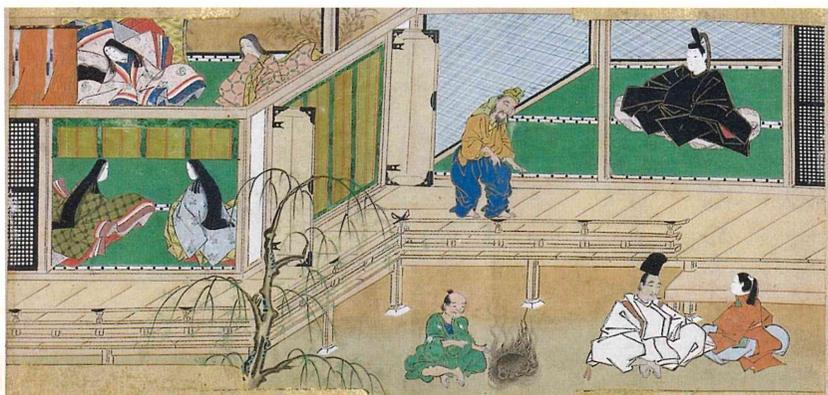
石作の皇子は、「仏の御石の鉢」を手に入れるために天竺（インド）に行くといわって、人々の前から姿を隠し、大和国（奈良県）の山寺にあった鉢を持ってきました。かぐや姫はそれを見ましたが、かぐや姫はその鉢に光がないことを指摘して、偽物と見破りました。

くらもちの皇子



蓬萊の玉の枝
 蓬萊山に生えるという、
 寶石でできた木の枝。

くらもちの皇子は、職人に作らせた「蓬萊の玉の枝」を持ってきて、それを手に入れるまでのさまざまに苦労や蓬萊山での不思議な体験を言葉巧みに語りますが、そこへ職人たちが来て、約束の褒美をまだもらっていないと訴えたため、うそが露見しました。



右大臣阿倍御主人

火鼠の皮衣
唐土（中国）にあるとい
う、火に入れても燃えない
衣。

右大臣阿倍御主人は、豊
かな財力を持った人だった
ので「火鼠の皮衣」を唐土
の商人から莫大な金と引き
換えに手に入れましたが、
姫の指示で火に入れてみる
と、皮衣はあつというまに
燃えてしまいました。



中納言石上磨足

竜の首の玉
竜の首にあるという、五
色に輝く玉。



大納言大伴御行

大納言大伴御行は、「竜
の首の玉」を取ろうと船に
乗り込みます。しかし、激
しい風や雷に遭って船は
難破してしまいました。

燕の子安貝

燕の腹にあるとされる貝。
中納言石上磨足は、子安
貝を取ろうとして籠に乗り
ましたが、綱が切れ、落下
して死んでしまいました。
かぐや姫は、「あはれ」（気
の毒だ）と思いました。